



第 20 号
 月 1 回 発 行
 ひの心を継ぐ会
 〒799-1336
 住所: 愛媛県西条市
 上市甲 720-1

綱 領

- 私達は明德を明らかにします
- 私達は国家の鎮護となります
- 私達は 大和世界を建設します

神道(五) (大和世界の建設)

古事記

北と一 (3)

— 八卦と洪範九疇 —

竹葉 秀雄

「つまごみ」の歌

「ここで触れておきたいのは、後に出てくる速須佐男命の「つまごみ」の御歌である。日本武尊、雄略天皇など歌は英雄の生命から鳴り響き出するものか。日本の敷島の道である和歌のはじめが、最も荒ぶる神であり後英雄神となられた須佐男命によって詠み出されたのである。その歌は

やくもたつ 出雲八重垣 つまごみに 八重垣つくる 其の八重垣を

榊名田比売を娶られて、その籠り寝るべき寝所の宮に八重垣をお作りになったときその「すがすがしい」とお喜びになった須賀の地から雲が立ち騰ったのである。感動の籠った絶唱である。私はこの歌を唱して、前述の河図洛書の象を思い出す。湧き出づる四方の白雲の中にこもり給った須佐男命と榊名田比売。「汝は右より廻り逢え、我は左より廻り逢わん」と約りて美斗能麻具波比せられた御祖の神言がここで自らに行われているのである。八雲八重垣は周囲の四つまたは八つの数である。河図においては、陽三が左旋して二を取り、陰四が右旋して一を取り五となつて中の宮にこもる。洛書においては、北の一が東の三、南の九、西の七、と左旋し、南西の二が東南の四、北東の八、西北の六と右旋して中央の隠所の宮で美斗能麻具波比して国産み神産みをなされたそのことと符節を合せて相協していることである。純

粋な生命は自ら神理に協うのである。美斗能麻具波比は最も神意に協うことであり、その一体となった境地は小さい自己を忘却して天にいたる感動無我の世界、そこは中央の五の世界、そこは天之御柱の世界で天之御中主神の世界にいたる位である。偉大なる生命の須佐男命の感動から生れた響、和歌は自ら伊邪那岐伊邪那美の神言に協い、神々も弥栄へを祝したまうて、いよいよ白雲を四方八方に立ち騰らしめ給うたことであろう。男女の道のみではないこの陰陽奇遇の道に協ったとき、天之御中主神の神霊に触れて一大感動が全身心にみちるのである。伊邪那岐神の神言は最極の教示である。

美斗能麻具波比は最も神聖神妙なるが故に隠所におこすもの、八雲八重垣の奥深く「つまごみ」すべきもので、これが人間の性である。慎まざるべからず。然らずんば、その子孫に純粹なる人の子は生れなくなるであろう。

第二章 農の史的考察

菅原 兵治

第二節 本邦史の変遷概観

鎌倉開幕

而して藤平両氏滅亡の跡に鑑みて、京都が到底「質」の地で無いことを知った頼朝は、遂に幕府を関東の地鎌倉に開いた。鎌倉の地たるや、義家以来源家の勢力を扶植した処とはいえ、当時は全く未開夷狄の地であったのである。其処に中央政府を開くということは、彼が如何に浮文に墮することを恐れたかが窺われるであろう。上の好む処下之より甚だしきは無し。かくて鎌倉幕府は、最も質の政教の漲れる時代であった。鎌倉幕府の政治が質の政治であったことは、既に喋々を要せぬ処であろう。然し此処に其の最も著しい特徴として、その政治が、尚武的にして簡易であったということ、地方の自治を重んじて常に地方人民の間に勢力を扶植し、その利福を保護したことを挙げ得るであろう。次に道德の方面より之を見るに、私共の見通してはならぬ武士道がある。武士道は種々の方面より観察することが出来るであろうが、私は之を質の道德であると謂いたい。次に宗教界より見るも矢張り質の宗教が勃興している。平安時代に発達した真言天台の二宗は、其の末期に到っては已に浮文的状态に陥っていた。之に対して新しく勃興した宗教が、禅宗であり、浄土宗であり、日蓮宗である。之等の宗教は各々特徴はあるも、宗教を華麗煩瑣なる儀式と理論的学問から解放して、簡潔純一なる実行的教義を以て国民に臨んだ点に於て、正しく質の宗教と称さるべきであろう。かくて鎌倉時代の初中期には、其の政治に於て、其の道德に於て、其の宗教に於て、何れも澆刺たる質の精神気魄が横溢していた。その最も力強い証拠は、彼の蒙古襲来に対して、雄々しくも示した鎌倉武士——否、それによって代表せられし日本国民すべての「驀直去」底の態度であった。不祥の想像ではあるけれども、若し彼の元寇襲来が、平安公卿の治世に於てならば、果して如何なることになったであろうか。(注)元の使者が日本国の臣従を強要する国書を持して来るや、執権時宗は日頃参禅せし祖元禪師を訪うて尋ねた。

「大事到来す、如何か回避せん」

「禅師大喝して曰く」

「驀直去!……(驀直に去け!)」

かくて頼朝の浮文を恐るる周到なる用意は果して其の効果があつた。頼家は種々の事情で三代で亡んだとはいえ、其の幕府は北条の滅亡まで続いた。——否、見ようによつては足利徳川を通じて明治維新まで続いた。(彼等は皆源氏の流であると称し、且つそれを誇りとした。かくしなければ天下の武人が其の幕府に信服せぬまでに源氏の力が長く支配力を有していたと見得るのである。)然しこの長き七百年の武家政治にも幾たびかの汚隆があつた。今これらの循環をまた文質交替史観によつて眺めて見ることにする。

浮文に墮することを極度に警戒した鎌倉幕府は、流石其の政治の質実さを失わず、代々の執権には、矢張りそれに相応しい為政者を出している。(時頼の如きは行脚僧の姿で農村の視察をさえ試みている。)然し其の末期に到つては、一面に於て元寇の戦勝に伴う奢侈弛緩と、高時の如き懦弱暗愚な為政者の出たことは、浮文的状态を現出し、それに一面に於て極端に武を偏重せし結果は人心をして瀆武に墮せしめ、かくて鎌倉末期は遂に世紀末の現象を現出し、浮文と瀆武との両面に逸脱するに到つたのである。

建武中興

此の機に乗じて兼ねて多年武家の優越を快しとしまなかつた京都の公卿一派が、政権を鎌倉から京都に回収したのが建武の中興である。然し茲に私共の深く考えねばならぬ一事がある。それは日本の社会的な大改革は、常に「質」の所有者が錦旗——然り、そは我が皇国の造化の主体——至尊の象徴である。——その錦旗を奉じて断行する処に、本格的なる成功の力がある。然るに憾むらくは建武の中興は何れかといえ「文」が「質」を倒さんとしたものと見得るであろう。従つて彼等の尊王盡忠の壮烈なる精神は、楠木正成や新田義貞の苦闘は別とするも、兒島高德の赤誠や、北畠親房の思想等に、何れかといえ「文的表現」としては極めて尊いものを遺しているけれども、實際政治に至つては政権の後に之を支持すべき強力なる実力無く、且つ其の政治が兎もすれば中央偏重に走つて地方民正の幸益を忘れ勝ちであり、且つ為政の局に當る者が自己の名利に走れる等の事情で、京都貴族の政治は浮文的状态に陥り易く、諸国の武士の中には却つてこの新政治を喜ばぬ者あるに至り、斯くて五十余年にして世は再び武家党の頭目たる足利氏の手収めらるるに到つた。——勿論その進退に於て順逆を誤りし罪は容すべからざる

も、兎に角事實は然うなつたのである。帰質の道を講ぜざる改革は其の赤誠の焰の赫灼たるにも似ず、かくて惜しむらくは失敗に終わったのである。

足利時代

かくの如くにして世は忽ちにして又足利幕府の武家政治に還つてしまつた。然るに足利尊氏は当時の事情上止むを得ずとはいへ、幕府を「文」の地京都に開いた。尊氏が幕府を京都に開いたことは、正しく一大禍根であつた。此処に在つて京都公卿に威勢を示し、之を懐柔し抑制して行くには、畢竟黄白の力を借りねばならず、かくて足利幕府は開幕の当時より既に経済生活に於て無理算段を敢えてなしてまでも、浮文的虚勢を張ることに汲々たらねばならなかつたのである。三代將軍義光が明の正朔を奉ずるが如きも、実にこの為であつた。

本を繙けば

三浦夏南

先日ある大先輩から菅原兵治先生関連の本を頂き、その中に安岡先生の『陽明学十講』があつたのでおもむろに開いて見ると、「自治自任論」の文字が目飛び込んで来た。常日頃自治の事を考えている私にとつて、その文字が向こうからやつて来たように感ずるものである。これは不思議なことだがよくあることで、たまたま開いたページに求めていた言葉が書かれていた。まるで、本に吸い寄せられるかのように必要な知識へと導かれるのである。つくづく無意識の力、目に見えぬ力の大きさを感ずるものである。目に見えるものは分り易く、全ては目に見え、音に消えるものの集積で結実するように錯覚するが、目に見えるものは実はその背後にあるものの結果或は現象に過ぎず、実はその背後にあるものが、全体の九割を占めているというのが現実ではなからうか。冰山の一角という言葉があるが、現象的に目に見え、音に聞こえる我々の経験はこの冰山の一角に過ぎないであらう。

これを教育に置き換えて考える。今の教育は個人の努力、勉強を過度に重んずる嫌いがある。確かに個人の努力は尊いものであるが、個人の為し得る勉強はその家が長い間に作り上げて来た家風に勝つことは出来ない。人は永き年月の中に育まれた暖か度且つ厳しい家の雰囲気化せられて、自然に人格を形成するものである。個人の努力は家風という畑に生育する花となるべきであり、さらに言えば、その畑を次世代の為に肥やす肥料として捧げられるべきものである。現代は皆が養分もないのに、無理に花を咲かせようとする。花や実は付けすぎるとかえつてその根幹を損なうものであり、無理に畑を肥やせば、化成肥料の如く、土を壊すこととなる。植物に当り前の事が人間の教育という一大事に於ては全くできていない。この事に関して思い出されるのは安岡先生の教えて、どの著書にあつたお言葉か定かではないが、親が身分不相応の出世をすると子や孫が栄えようと思つても栄えられない。本當に賢い父親は常に身を慎み、内に学問を積んで、外に必要以上に自らを表さぬ謹厳なる処世を行うべきであるという趣旨の事を書かれていた。これは老莊流の世捨て人のように思われるかもしれないが、そうではない。人を個人として考えるのではなく、飽くまでも国家家族の大きな流れの一部として

人を位置づけている。人を一族一体の一部分として考えないから、小粒で器用で妙に専門的な人間が出来てしまうのである。農に勤しみ、一族一体で相親しみ、内には学を蓄え、外には武を嗜む。学問は広く神道を基盤として儒教、仏教も学び、西洋の学術にも通ずる。武道は実践的でありながら求道的でもある。ある時は教育者として現われ、ある時には政治家として実務を論じ、ある時には運動家として実力行使も厭わない。斯くの如き幕末の志士達の如き重厚にして壮大な全人的とも言うべき英才は決して個人的な知識の集積、現象的な経験の蓄積によって至れるものではない。あたかも複数の人間が一人の内に同居しているかの如くである。如くというよりも同居しているのであろう。志士の内には家族の魂、祖先の魂が息つき、それが具体的に活動状態にあるのだ。我々現代人はこの横に繋がり、縦に通ずる無限力の回路を切断して置いて、或る種無意味な努力をこの肉体的上に積み重ねようとしているのだ。これでは吉田松陰先生や西郷南洲翁に追いつけるはずがないではないか。そもそも前提が違うのである。

我々は歴史上の人物を見る時常に遅れている、届かないとの感を抱くが、この距離は我々一世代の距離ではないことを重く受け止めるべきだ。先生方が立ったスタートラインから考えれば、我々はマイナスの位置にあることを自覚しなければならぬ。これが自覚できれば、スタートラインに立つにはどうすればよいか、そこまで少なくとも何世代かかるかが、臆気ながら見えて来る。その時初めて何を学び、実践すべきかを理解することが出来るのである。戦前の昭和維新志士達が行き詰まる世界との競争の中にあつて何故に農本を唱え、自治を叫んだのか、事務に最も通じ、未来を見通した先生方が何故迂遠と罵られる道に進んで行かれたのか。自ら考え、実行しなければ生き残ることすら出来ない過酷な日本の現実がそこまで来ているのである。エコノミックアニマルと揶揄され、戦後の虚構の繁栄の中に言い訳を求め続けて来た日本も、今まではアニマルであつてもまだエコノミックではあるとの虚勢があり、一目は置かれていたかもしれない。今やエコノミックの文字を失つてアニマルとなり果てようとしている時、シナ、アメリカ、ロシア等の列強は我々を文字通りアニマルとして扱い始めるであろう。斯くの如き窮地からこそ自存自衛の心が生まれ、自治自活の実を挙げる事が出来る。しかしその基盤は常に目に見えない世界にあることを心に留めて為すべきことに邁進したいと思う。

とよくも農園だより

三浦 美恵

今月は、ネギの収穫、来年の里芋の準備、ニンニク、玉ねぎの定植、アスパラガスの手入れをしました。

まずは今月多くの時間を費やしていたネギです。今春には低迷していたネギの価格が、秋になって高騰したため、現在は春の三倍の値段で取引されています。朝家を出ると軽トラにコンテナを積みこみ、ネギの畑に向かうのが日課になりました。雨が降るとネギが水を吸い、柔らかくなって折れやすくなるため、晴れの日が続く時が収穫のチャンスです。ネギの葉が折れないよう慎重にコンテナに積めていきます。持ち帰ると、水を張った桶で根についた土を洗い落とし、折れや虫食い、病気が無いかも確認しながら、一つ一つのネギの外皮を剥いて行きます。それが五百グラムになると一束にまとめ、段ボールに詰めていきます。十束できると五キロの段ボールに入れ、地元の青果会社に持っていきます。七月の月報を見返すと、夏には夫婦二人で一箱を詰めるのに一時間かかっていましたが、今では二人で一箱二、三分でできるようになっていきます。何でも慣れると手際が良くなることを実感します。

続いて里芋の準備です。来年は里芋を中心に育てようと考えているので、来春に五反の里芋が定植できるよう、畑に鶏糞をふっていきまます。肥料は直前にまくものもあれば、鶏糞のようにあらかじめ発酵させる必要のあるものもあります。段取りよく進めなければ、天候に左右されて仕事が遅れることもあるため、最初の計画も重要です。

また、ニンニクや玉ねぎの定植も行いました。今年、自分達が去年育てたニンニクを種にして植えて行きました。最終的には自分達が育てた野菜から種を取り、それを次の年へと繋いでいきたいと考えています。

最後はアスパラガスについてです。最近、先月定植したアスパラのハウスに毎朝



様子を見に行き、ハウスの窓を開けて換気をしたり、水やりをしたり、枯れた葉を落としたりしています。始めは苗に手で水をやっていましたが、全ての苗に十分な水をやるうとすると、それだけで半日かかってしまうため、スミホースというホースを各苗の横に這わせ、それを使って水やりをすることにしました。このお蔭で、十分もあれば全ての苗にたっぷりと水をやるようになりました。一カ月ほど前に定植したアスパラの苗は次々に新しい芽をつけ、順調に育っています。アスパラは他の野菜とは違い、地中に根を張り、約二十年もの間同じ株から次々に新たな芽を出す野菜です。このアスパラガスの苗が老いる頃には、三浦家の勤皇村はどのように発展しているのだろうかと考えながら、次作の準備のため、今日も畑へと向かいます。



★活動報告

・十一月二十日(水) 十九時～二十一時 相談会「三間村塾再建に向けて」
寺川正一さん旧宅(愛媛県松山市高井町六-三一)

・十一月二十三日(土) 十三時～ 秋季例大祭(初穂祭)
大和神社(愛媛県東温市樋口)

・十一月二十七日(水) 十九時～二十一時 勉強会『古事記』
寺川正一さん旧宅(愛媛県松山市高井町六-三一)

★今後の予定

・十二月十一日(水) 十九時～二十一時 相談会「三間村塾再建に向けて」
寺川正一さん旧宅(愛媛県松山市高井町六-三一)

・十二月十八日(水) 十九時～二十一時 勉強会『古事記』
寺川正一さん旧宅(愛媛県松山市高井町六-三一)

★一燈照偶 万燈照国

ひの心を継ぐ会は竹葉秀雄・近藤美佐子両先生の精神を継承し、発展させることを目的として生まれた会です。一人の「ひ」の精神が周囲の人々の心に「ひ」を燈し、やがてそれが国を照らす「ひ」になることを願い、活動を行っております。皆様には何卒ご理解とご支援を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

年会費

- ・ 一般会員 三千元
- ・ 賛助会員 一万円
- ・ 特別賛助会員 三万円
- ・ 支援会員 一万円

